

第1問次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

「1」 「あいまいだからよい」というに(ア)サイ¹たるものは、他ならぬ言語である。言語は人間にとつて、もつとも普遍的な(注)契機であつて、言語の使用は生きた人間の日々の証である。言語が「あいまいだからよい」のであれば、人間の日常性はあいまいさによつて支えられているわけである。

「2」 無限の奥行きと多様性を見せる人間の意識の対象世界に対して、言語の世界は有限性によつて特徴づけられる。言葉の数は有限だし、一度に発話される文の長さも有限である。言葉の数の有限性は、第一に、ひとつひとつの言葉の意味内容に広がりをもたせ、第二に、意味の多義性を惹き起こすことになる。語られるべき世界の事物は連続的に連なっているのに言葉の数は有限である。このことから、必然的に、ひとつひとつの言葉は、広がりをもった領域を受け持たざるを得なくなる。A言葉のこの性格に対して、多義性は副次的なものである。なぜならば、ひとつひとつの言葉が仮に数個の意味をもったにせよ、言葉の総数が高々数倍になる効果を生みだすだけで、このことは連続世界の多様性を前にしてほとんど無力だからである。

「3」 言語理論のいう分節化とは、連続的な世界を言葉によつて切りとり、指示する作用のことである。言葉は音素列や文字列で構成される不連続なものであるから、分節化は連続世界の離散化である。この離散化ということが、必然的に言葉のあいまいさを生みだすものとなる。B誰

にとつても共通な、確定的な部分への離散化ということは、空想的な所作である。あらかじめ、言葉が対象の世界のこれこれの確定領域を指すように作られているとすれば、まったく同一の領域に出会う以外に、そして、出会うことはほとんどないであろうから、そのような言葉を使用することはできず、したがつて、その言葉は失われていくであろう。すなわち、言葉によつて切りとられる対象世界の部分領域はあいまいな周辺をもち、人によつて定義が異なり得て、また、そのような仕方では世界を分節化する言葉が一般に存在し得ることになる。にもかかわらず、表面的には確定的な定義をもつ言葉があるとしても、日常世界で使用されるときには、あいまいな領域を指示するのである。C「机」ということばによつて切りとられた世界の断片は確定的な周辺をもっていない。しかも、この周辺は常に揺れ動くのである。時によつて、場所によつて、話し手によつて。シャープに思える言葉も、実際の使用においては、意味内容はあいまいになる。たとえば、ホテルで、「(注)チェックアウト・タイムは十一時です」というとき、この「十一時」はたぶん十二時ごろまで周辺がのびている十一時である。

「4」 言葉の「曖昧性」を間接的に物語っているのは、数学が(注)自然言語を使用せず、(注)人工言語を使っていることである。すなわち、数学世界の(注)二値論理的概念を自然言語で表すことが不可能だからである。別の言い方をすれば、数学世界は自然言語では分節化されないわけである。逆に、人間の意識世界を数学の人工言語で分節化できないのも当然である。

「5」 人間の自然言語を語るとき、言語をその使用と切り離して考えることはほとんど意味がないし、言語のコン(イ)グ²的性格を見失う結果になりかねない。言語の二つの使用の場合、それは思考とコミュニケーションである。言葉のもつ「曖昧性」という性格は、思考とコミュニケーションの場合ではまさに本質的に現象するといえる。

「6」 意識化された思考は言語の形態をとり、言語なくして、思考なしともいえる。思考の系列というものがあるとすれば、それは同時に言葉の系列である。思考で用いられる言葉があいまいであるのは、なによりも、思考が実時間の動的プロセスだからである。思考の場合においては言葉による現実世界や意識世界の分節化が行われる。思考の流れは言葉によつて切りとられた世界の断片が時系列的に連なっていくものである。このとき、分節化された世界のひとつひとつの断片

は、確定的定義がなされぬまま、あいまいな周辺を引きずって、次々と接続されていく。意味内容は確定されることはなく、というより、不確定のまま切り上げられるからこそ、思考は前進できるのである。思考はなによりも、有限の時間で区切りをつけることが(ウ)ヨウセイされ、Dこのことが変化する現実世界の中で人間が生き残る術なのである。

〔7〕 思考におけるこのような状況はコミュニケーションの場では、さらに厳しいものとなる。限られた時間で、言葉をやりとりし、互いに理解しあうことを目指すとき、言葉の定義を互いに確定している暇はない。意味が二値論理的に限定された言葉を使つたとしたら、完全に同じものが自分の内にながために相手の言葉を理解できないということが始終起こり、コミュニケーションが成立しなくなるであろう。また、よりテキ(エ)セツな言葉を探している暇もない。だから、コミュニケーションにおいて言語は自分の言葉と相手の言葉が、それぞれ広がりを持ち、すくなくともその周辺部分において、漠とした共通の領域が見出される可能性が大きいものであることが必要とされるのである。相互理解において、共通領域の存在は決定的な契機である。これは相手の体験と自分の追体験が重なり合うことができるということを意味している。共通部分はなくとも、相手の言葉と自分の言葉の距離がわかれば理解しあえるというのは誤解である。相手の言葉を理解せずして、どうして、(オ)ヒガの距離を測れよう。

〔8〕 こうして、思考とコミュニケーションにあつては、言語はその「曖昧性」ゆえに使用に堪え、このことは言語の存立基盤に「曖昧性」が深くかかわっていることを指し示している。すなわち、「言語はあいまいだからよい」のである。

(菅野道夫「ファジー理論の目指すもの」による)

(注) ○ 契機——そのものの成立のために欠くことのできない本質的要因。

○ チェックアウト・タイム——ホテルなどで客が勘定を済ませてそこをひきはらわなければならぬ最終の時刻。

○ 自然言語——人間が生活の中で普通に使っている言語。

○ 人工言語——自然言語に対し、論理式や数式の形をとって人為的に構成された言語。

○ 二値論理——物事を、真か偽か、正か負か、Aか非Aかのように、中間項を認めないでとらえていく形式の論理。

問1 傍線部(ア)～(オ)に使用するのに最も適当な漢字を、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)サイ|たる

① 才
② 再
③ 際
④ 最
⑤ 宰

(イ)コン|ゲン

① 現
② 玄
③ 言
④ 限
⑤ 源

(ウ)ヨウ|セイ

① 要
② 容
③ 養
④ 用
⑤ 擁

(エ)テキ|セツ

① 接
② 切
③ 設
④ 節
⑤ 撰

(オ)ヒガ

- ① 比
② 否
③ 非
④ 彼
⑤ 秘

問2 傍線部A「言葉のこの性格に対して、多義性は副次的なものである。」とあるが、それを説明すればどのようなことになるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 一つ一つの言葉が連続世界に対応して意味内容の広がりをもつことに対し、多義性は連続世界の多様性とは無関係だということ。
- ② 世界の連続的事物を語る際に言葉があいまいさを生み出すのに対し、多義性はあいまいさを生み出さないということ。
- ③ 言葉が有限であり生きた人間の日々の証であることに対し、その多義性は人間の意識の対象世界の多様性に伴ってあとから生まれるものだということ。
- ④ 連続世界を表現するために言葉が意味内容の広がりを現出することに比べれば、その多義性は連続世界を表現するにはほとんど効果をもたないということ。
- ⑤ 連続世界を表現するために言葉が無限の意味の広がりをもつことに比べれば、多義性は新たな造語の契機とはなっても、言語理論という分節化の効果をもたないということ。

問3 傍線部B「誰にとっても共通な、確定的な部分への離散化」ということは、空想的な所作である。」とあるが、筆者は「誰にとっても共通な、確定的部分への離散化」を、なぜありえないというのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 一つ一つの言葉がそれぞれはつきり確定された世界の一部分を指すようにできているのであれば、そのような指示対象がまったく固定してしまう言葉は、ほとんど実際の役に立たないから。
- ② 「確定的」という概念と「離散化」という概念は、原理的に相矛盾するものだから。
- ③ 言葉は、音素列・文字列で構成されているもともと不連続であいまいなものだから。
- ④ 離散化、すなわち言葉によって切りとられる対象世界の部分領域は、本来客観的にあいまいな定義をもつものだから。
- ⑤ 連続世界を確定的な部分へ切りとろうとすれば、連続世界の多様性に合わせて、言葉が多義的なものとならざるをえず、ついには無力になってしまうから。

問4 傍線部C「『机』ということによって切りとられた世界の断片は確定的な周辺をもっていない。」とあるが、それは具体的にどのようなことをいっているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 「机」という意味のことばが、世界中のいかなる言語にも存在するかどうか、だれにも保証はできないのである。

- ② 「机」ということばの意味するものにしても、その形状や用途など、人により考える範囲は一致しないのである。
- ③ 「机」ということばも、「つくえ」のように文字を変えると、そのイメージはたちまち変化するのである。
- ④ 「机」ということばには、「テーブル」などの類義語が存在し、いずれが日常的なものであるか定めがたいのである。
- ⑤ 「机」ということばの定義は、時代の推移とともに少しずつ変化し、揺れ動いてやまないのである。

問5 傍線部D「このことが変化する現実世界の中で人間が生き残る術なのである。」とあるが、これを日常の具体的な場面に即して考えるとして、もし「このこと」がなかったら、どういう不都合が起ころと考えられるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 例えば、接近する対象を、言葉の確定的定義に照らしていちいち認識・判断してかからなければならぬのなら、タクシー一つ拾えないだろう。
- ② 例えば、一つの花を「あやめ」なのか「かきつばた」なのか、言葉の確定的な定義に照らして認識に戸惑っているのは、判断を誤ってしまうだろう。
- ③ 例えば、考古趣味にかられマンモスの牙が何メートルであるかということだけを考え続けていては、明日の食事にもありつけないだろう。
- ④ 例えば、討論の場で言葉じりをあげつらうのにお互い時を費やしていたなら、議論はいつまでも平行線をたどるだろう。
- ⑤ 例えば、さまざまなニュースを真か偽かきちんと判断しないでいては、いつまでたっても真実は見えてこないだろう。

問6 本文の中で述べられている内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから二つ選べ。順序は問わない。

- ① 自然言語の具体的な事例をもとにして、あいまいな人間の言語がいかにあるべきかを探っている。
- ② 言語理論という分節化という概念を手掛かりとして、言語の「曖昧性」の所以を探っている。
- ③ 数学が人工言語を用いているという事実を通して、逆に自然言語のあいまいさを確認している。
- ④ 言語なくして思考なしという事実の裏づけを、無限の奥行きと多様性をみせる人間意識の中に見いだしている。
- ⑤ コミュニケーションの成り立ちの基礎に、確定した共通の領域の必要性を見ている。
- ⑥ 使用の場から切り離れた人工言語の特質を手掛かりに、自然言語のあいまいさの問題点を論じている。